

第2回目 感想

環境情報学府 環境リスクマネジメント専攻

D2 女

様々な分野でご活躍されている先輩方の話を聞くと、本当に深く考えさせられる。

本日の講義も本当に考えさせられた。

中村先生のお話は病気というターニングポイントのなかで、自分が研究者としての道を歩むべきだと決め、今現在も第一線でご活躍されていることをとても感動した。

年齢など、関係ない。自分がこの道と決めた道ならば、あきらめずにすすむことが大切である。講義を聴き、実感した。

人生何が起こるかわからない。病気もその一つであろう。病気に限らず、どんなターニングポイントは良くも悪くも訪れる。どんなときでも、冷静さを保つことを忘れてはいけない。キャリアを積むことは一人では経験を積めない。多くの支えがあつてこそ、女性は成長し、強い女性となる。

そして、多くの支えと理解が信頼関係を築き、女性は様々な困難をバネに一步を踏み出す勇気となる。女性にとってのターニングポイントはキャリアにとって重要である。様々な経験が良い影響をもたらし、結果へとつながっていく。

女性がキャリアを積む以上、その支えの影響力は強い。そして、その環境の充実も多くの課題がある。

いくら将来につなぐ経験を積んでいても、その環境が整っていなければ、すべてが無駄となってしまう。無駄な経験などないが、やはり十分といかなくても、支援は重要といえる。

こうした課題があるなかで、現在取り組んでいる大学内の男女共同参画は実に期待できる。

多くの女性研究者や学生が学ぶという視点で環境が整っていくにはどうしたらよいか。男性研究者や学生の理解とともに、ともに協働し、共に支えあうことが重要といえる。

まだまだ大学は女性にとって良い環境となるには時間が必要かもしれない。しかし、一步踏み出すことこそ、これからの大学を支えるうえで重要なことといえるのではないか。

* 環境情報学府 環境生命学専攻

D1 女

中村先生の講義を、私は修士課程2年の時に受講しました。自分の研究の中で大気中微量成分の測定データを用いた考察も進めていたのですが、こうしたデータはどのような分析をして得られるのかを知りたくて受講しました。先生の講義内容は自分の研究と直接関連しないこともあり、毎回始めて知る内容が多く、その度に調べて学ぶという状態でした。それでも欠かさず受講し続けたのは、門外生が安心して未知の分野に触れさせてもらえたことと、講義を通して伝わってくる中村先生の研究に対する思いや授業に対する姿勢から学ぶものが多かったからだと思います。それがきっかけとなって、昨年の女性キャリアパス一般公開講座にありました、中村先生の研究者としての生き方を知りたくて講義を聴きました。その時、これはおもしろい主旨の企画だと思い、今回受講したという経緯があります。

さて、昨年、中村先生の講義を聴いたときも思ったのですが、共感する点がいくつかありますので、感想として述べたいと思います。

中学のとき、才女と言っているような地学が専攻という理科の先生から指導を受ける機会がありました。高校のときには研究を楽しんでいらっしゃる地学の先生から、教科書に書かれていないことばかりの授業を受けることができました。海洋底拡大説や、海底磁気異常、地磁気逆転、プレートテクトニクス説、さらには相対性理論など、当時の自分としてはビックリするような内容ばかりでした。すぐに本を買って求めて読んだのを覚えています。そして、私も地学を専攻して楽しい授業を創る先生になりたい、地学のおもしろさを生徒に伝えたいと思うようになり、理科教員を目指す道を選びました。先生の影響というところで、中村先生と少し似た点があるように思いました。

子どものときに学ぶことが楽しいと思うかどうかは先生の影響が大きいと強く感じます。大人になっても同じです。私自身この講義を受講したのも中村先生の影響があると思います。

当たり前のことですが、研究には必要な基礎知識が必要です。すでに小学生のときに知識習得の基礎作りが始まっています。生徒が知識を得る原動力として、学習内容に対して好きとか出来るとか面白いといった心の動きが必要です。そのために教師として出来ることは、質の高い授業創りはもちろんですが、何よりも大きな力は教師自身が自分の専門とする教科を楽しみ真摯に向き合っている姿勢だだと思います。その姿から、生徒は学んでみようという気持ちが出てくると考えています。

女性の大学院生にとって、同性の先生方の生き方を知る機会が得られることは、自分の人生選択の参考になると思います。先生方の研究に対する思いを知ることで自分の将来像を描くこともできます。研究法や考え方の参考にもなります。そういった意味で、たくさんの女性大学院生にこの講義を受講してもらえるといいなと思いました。

山田先生の講義内容にありました、女性が働きやすく長く続けられる職場環境作りは、今働いている人々にとっては優先課題だと思います。結婚や子育てが研究や仕事を続ける

上での妨げにならないように変えていく努力は必要でしょう。今いる大学院生や研究員が学内の環境が整っていると知れば、今後も横浜国大で研究を続けたいという選択にもなるでしょう。

できればそれ以前の、将来の研究者達の入り口の改革も早急に考えていただければと思います。女子学生が「横浜国大の大学院で学びたい、研究したい」と思って受験したくなるような付加価値がある環境作りです。今の時代の小中学生が育っている家庭環境や学習環境を踏まえた上で考えられる大学院に求められる付加価値です。そして、私もその一人ですが、学び直しとして大学院を訪れる社会人女性が、家事と両立させながらも続けられるような研究環境作りです。一人で家事を担っている場合でも続けられるような環境であれば、学習意欲の高い中高年の女性が横浜国大の研究室を選択し、研究を始めることができます。私も周りに遠慮せず研究を続けることができます。

また、先生方のご発言の中にもありましたが、大学院と小・中・高校との連携もイベント的な授業にならず、長期計画の授業構成であれば効果が高いと考えています。小中学生が女性大学院生とふれあう機会ができれば、憧れて研究者を目指す女子生徒が出てきそうです。

過去の努力があったからこそ今があるわけですが、新たに研究を志す女性達が横浜国大を望んで選択してくるような学内環境作りも、職場環境作りと合わせて検討してもらいたい課題だと実感いたしました。

* 環境情報学府 環境生命学専攻

M1 女

3限の中村先生の講義では、先生のこれまでのご経歴と研究についてお話を伺うことができました。子供時代の理科好きから、中学校の理科教員を目指されていたとのことでしたが、学部卒業後すぐには中学校教員の夢を実現できる環境にはなく、大変残念だったことと思います。しかし、結果的に大学での実験助手として採用されたのは、学部時代やそれ以前までの中村先生の研究への真摯な取り組みの積み重ねがあったからこそなのではないかと拝察します。中村先生は周囲の人々や環境に恵まれた部分についてもたくさん言及されていましたが、助手という研究者への道の第一歩のチャンスを得られたのは、きっと先生ご自身がそうなるべくして得られたものなのではないかと感じました。私自身は現在、博士前期課程の学生で、その修了後は就職したいと考えています。能力的なことに加え、経済的・年齢的（社会人経験後に入学の為）な事由からも、博士後期課程への進学は考えていないのですが、可能な限り研究に携わった仕事を探したいと思っています。論文博士の取得への希望もわずかながら心に持ち続けたいと思っています。

ましたので、病気を経験され、子育てを続けながらも中村先生が論文博士を取得され研究者としての道に邁進されたことに、深い感銘を受けました。人間の人生や人間の幸せは、その人それぞれだと思いますが、自分も自分の中だけの小さな世界で失望したり諦めたりせず、自分らしい生き方を見つけていけたらと思いました。また、自分の専門ではありませんが、水質汚染についてはとても興味があったので、中村先生の研究についてのお話を伺えてとても嬉しかったです。すでに確立されている機器分析のみでなく、新しい分析手法の開発や、その迅速さ・簡便さの追究、有害物質の不使用を目指されていることにも、とても興味を魅かれました。恩師の先生のお言葉のとおり、常にヒットを（おそらくホームランも含めて）飛ばし続けていらっしゃる中村先生のご活躍に、勝手ながら今後も注目したいと思いました。今日の中村先生のお話をお聞きして、現在の自分の地道なデータ取りの日々にも前向きに取り組み、これからの自分を少しずつでも成長させ続けたいと思いました。

4限の山田先生の講義では、男女共同参画に関する横浜国立大学のこれまでの歩みと、今後の展望などについて、お話を伺うことができました。大学組織としての動きは学生にはあまり馴染みがありませんし、それに関して自分もこれまであまり興味をもっていなかったというのが正直なところです。しかし、女性が研究職を目指す土壌がこれまでの日本にはあまりなかったことや、妊娠・出産の影響や、主に女性が育児を担当することが一般的な現状を考えますと、やはり男女共同参画ということは社会的に必要であると考えようになりました。前回の志田先生のお話にもあったとおり、人間はやはり育った環境や周囲の人々の状況に影響されるところが大きいと思います。どちらかという男性が働きやすい環境にあるのが現状だとするならば、男女が同じように働き、男女が同じように育児や家事をできるような環境をつくっていったならば、将来、仕事を持ち、継続する女性が今よりも飛躍的に伸び、それによって全体の労働人口が増えれば、経済的な充実にもつながります。そのような環境で育った人間は、男女ともにそれをうまく工夫してより生活しやすい社会を作っていけるのではないかと、理想過多ではありますが思いました。山田先生はもともと土木がご専門でいらしたとのことですが、研究者、教育者としてだけでなく、副学長として大学の組織を運営していくという役割も担われ、積極的に男女共同参画の推進に尽力されていることをとても心強く感じました。今日の講義後の質問の時間には、男女共同参画へのいろいろなアイデアがでていて、その取り組みの難しさも知りました。その中で、女性の卒業生・同窓生のコミュニティの立ち上げのようなお話もありましたが、それをすぐに行うのは難しくても、例えば、「社会で活躍する女性卒業生へのインタビュー」をまず一人ずつでも定期的に記事にして大学HPにリンクを（目立つように）張ると、大学HPを訪れる女子高生の受験生や再就学を考える女性へのアピールにつながったり、学内の女子学生等の励みにもつながるのではないかと考えました。

* 環境情報学府 環境生命学専攻

M1 女

前回と同様に貴重なお話を聞くことができとても参考になりました。
中村先生のお話では水質分析の難しさや大変さを知ることが出来ました。
以前、ニュースで大さじ1杯の油を飲み水にするにはバケツ7杯分もの水が必要である
ということを知ったことがありましたが家庭から出される生活排水が水質汚染の1番
の原因とされています。最近騒がれている多くの環境問題の1つに水質汚染も含まれて
いますが汚染されているかどうか、どんな物質が含まれていて汚染されていると判断す
るのか分析する技術自体を環境への影響が少ないように配慮しているということがと
ても印象的でした。

また中村先生自身の経歴を聞き最初から博士課程を目指していた訳ではないことに
驚きました。そして今回のキャリアパスを受けて研究者である方というのは自分の専門
分野以外のことにも幅広く興味を持ち探求されているということ教えていただきました。
私の中のイメージでは研究者と言われる人は自分の研究以外には興味がなくひたす
らに自分の研究をつき進めていくような人だと思っていましたが、そうではなく何事
にも興味をもって探求し続けられるからこそ様々な視点から物事を考えたり分析したり
することが出来るんだなあ。と思いました。
私は研究をしても自分の研究以外が目に入らなくなりがちで幅広く物事をとらえ
たり考えたりすることが苦手です。でも、研究者のはしくれとしてなるべく色々な角度
から自分の研究を見て、色々な人から意見をもらい研究を進めていけるようにしたいと
思いました。

* 環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻

D1 男

先生方の貴重なライフヒストリーを聞けることが出来た。また、横浜国大の男女共同参
画の取り組みについて副学長から直接聞くことが出来た。大学内の託児所の設置は是非、
成功させて頂きたい。

* 環境情報学府 情報メディア学専攻

M1 男

中村先生のお話では自分の周りに理解ある方々がおられたがために今までやってこられた、とのことでしたが周りの人々以外に女性が社会に進出していく上でどのような点が厳しく、どのような点が改善されていった等のお話がなかったのは残念でした

次に副学長のお話ですがなんだかんだいっつも横浜国立大学では男女共同参画等ではまだまだ他大学に遅れをとっていると感じました

あと、国立大学法人横浜国立大学と横浜国立大が別組織であることを初めて知り、国立大学の法人化ということが如何に大きい変化であったのか改めて知ることになりました

また、自分が質問をした際に横浜国立では今までよりも多くの優秀な理系女子学生に大学を受験（入学）してもらうためにどのような手段を講じていく（またはすでに講じている）つもりなのか？という意図で質問したにもかかわらず、なりふり構わず（逆差別をしてでも）女子学生比率を上昇させるべきだとその意図を履き違えられたのは非常に遺憾でした。また、金井先生がその後同じような質問をされたときと返答の内容と態度が違った点も非常に残念でした

* 環境情報学府

M1 女

3 時限目 中村栄子先生

今までの先生方の専門分野のなかでは自分にわりと近い分野であったため、理解しやすかった。また、以前に比べ今の女性は働きやすく、恵まれた環境にいることを感じた。私たちの世代は恵まれた環境しか知らず、特に不自由しないのが当たり前のように思っている部分も多少あったと思う。特に、これから先のことは想像もつかず、何が不安要素となっていくのか、それすらまだ分からない状況にいる。どちらかと言えば先が見えないことへの不安があった。そんな中でこの授業を聞くことで新しい見解が開けたので、先が見えない将来への不安が少し解消した気がした。

4 時限目 山田均副学長

現在横浜国立大学が行っている男女共同参画の現状についてであったが、自分の知識不足のせいもあり正直、いまいち印象に残らなかった。金井先生がおっしゃっていたように横浜国立大学に特化したものが必要なのではないかと感じた。しかし、先生方のディスカッションを聴く機会はずがないので、興味深かったのと同時に、それぞれの先生方の熱い思いが伝わってきた。正直、大学は事務が中心になって運営するものだと思って

いたため、意外だった。

* 環境情報学府 環境生命学専攻

M1 女

今回は、学内レベルでの男女共同参画に対して実際に横浜国立大学に勤めていらっしゃる女性の先生（中村先生、金井先生）がどのように考えているのかのディスカッションが聞けたのが面白かったです。育児施設の需要の話など、これまで自分にとって大学は研究や学びの場であったのでそうしたものの必要性は考えたことがありませんでした。例えば自分がそうした立場になくとも、将来的に育児をしながら研究や仕事をする可能性はあるので、子育てと両立させなければならない人がどのようにしたらすごしやすい学校になるのかを考えるのは重要であると感じました。

* 工学府 物理情報工学専攻

M1 女

第2回目中村先生の話では、女性研究者としてのロールモデルが自分の周辺にいたことが励みになった、という話がとても印象に残った。私は工学部所属で、授業でもほとんどの先生が男性であり、女性研究者のロールモデルというものを持ってはいない。周りに女性研究者がいないというのは、私に限らず、工学部に進学している女性全般に言えることではないだろうか。近年女性研究者を増やすための取り組みがあちこちで行われているが、ロールモデルを持ちづらい環境にあるというのも、女性研究者が少ない一つの要因になっているのかもしれない。山田先生の話では、男女共同参画に取り組んでいる方が実際にどのようなことを行っているのかを聞くことができ、とても興味深かった。男性の側の転勤により、家庭を維持するために女性がやむなく仕事をやめてしまう事例を聞いて、男女が共に仕事を持ちながら家庭を築いていくには、様々な障害があることを改めて認識した。

* 環境情報学府 環境リスクマネジメント専攻

D1 男

○中村栄子先生

経営学的に、女性労働力の活動が社会的な課題となっている理由の一つは、少子・高齢化で男性現役世代が減少しており、これまで活用が十分でなかった女性の働き手を増やし、労働力を掘り起こすこと。もう一つは、「ダイバーシティ・マネジメント」の考え方による。これは、女性向けの商品・サービスの重要性が増すなか、商品開発やマーケティング戦略に女性独自の視点を入れようとするものである。また、男性と異なる見方のできる女性を登用することで経営の質の向上させる狙いもある。

そこで、女性労働力の活用促進に何が必要かといえば、女性の就業率が低い原因として指摘される「M字カーブ」を考える必要がある。つまり、子育てに時間を取られる30代や、介護の必要性が高まる50代で女性の労働力が低下するというものだ。保育や介護の負担が、「母」であり、「娘」であり、「嫁」である女性に社会的に集中しているものを、男女で共有すること、社会全体で支え合う仕組みを構築する必要がある。

各先生が、これまで大変なご苦勞（例えば、女子トイレの有無の問題）をされてきたことが、これまでの講義を通じて伺っているが、一方で、何とか学位を取得され、教職にありつけていることもまた事実である。世にいう「ポスドク」問題の中にあっては、おそらく成功者の部類に属するのではないか。男女を問わず、学位は取れても、職に就けないことの不幸に比べれば、各先生は実力にも運にも恵まれているといえる。

社会全体として、保育サービスの充実（私の職場にも、子供の保育園が決まらず、育児休暇から復帰できない女性がいる）が望まれ、また各先生からもそうした声が上がっていて、私自身その必要性を認めるが、どうも勝者の論理であるような気がしないでもない。

○山田副学長

男女共同参画担当のお立場から、お話を伺ったが、男女別に定数を定めることが法的に問題があるのなら、もはや教職なり入学なりの志望者の熱意に係っており、どうやっても理念的な目標を定めるのがせいぜいではないかという気がする。

ダイバーシティというと、とかく男女の話となりがちであるが、私のような社会人学生からすれば、フルタイム学生と社会人学生とのダイバーシティ、ひいては生涯学習の視点こそ、大学院に求められているのではないか？男女比率の問題は、国なり行政機関から求められこそすれ、社会からの要請・ニーズはむしろ生涯学習にあるのではないか？

形だけの男女共同参画担当の副学長よりも、生涯学習担当の副学長こそ必要なのではないか。私など、調査不足と言われればそれまでだが、募集要項にあった各種社会人学生向けの制度はともかく、本学に実は社会人受入体制が全くないことに失望している。夜間講義とは実は夕方講義のことであり、土曜の講義は本講義位、土日は激減するパス

なしでは通いづらい立地、学務係はウイークデーの9時5時のみで、諸届はあくまで紙ベース、書類は時間外ポストもない始末。数え上げればきりが無いが、本学は女性学生にとって以上に、社会人学生にとって不幸である。

むしろ社会人受入体制を確立することの方が、社会の要請やニーズに応えることとなり、結果的に、何らかの事情（例えば、一度家庭に入る等）で学業を中断せざるを得なかった女性にも学びやすい複線的な大学院になるのではなかろうか。